

# むさしの TALK

片桐はいりさん  
(俳優)

## 緑豊かで、文学の薫り漂い、 個性的な店がひしめくまちでした

俳優として巣立つ前の学生時代を、吉祥寺で過ごした片桐はいりさん。青春の思い出とともに、当時のまちの様子を語っていただきました。



片桐はいり (かたぎりはいり)  
1963年東京都大田区生まれ。成蹊大学文学部卒業。テレビや映画、舞台などで活躍。著書には、自らの映画愛を語った『もぎりよ今夜も有難う』(キネマ旬報社)などがある。30年以上の付き合いとなる映画館「キネカ大森」では、先付シヨートムービー『もぎりさん』が12月31日まで併映。

子どもの頃から日本文学、特に太宰治が好きだったので、ゆかりの場所がたくさんある武蔵野で学びたいと、成蹊大学に進学しました。この前、約30年ぶりに大学に足を踏み入れましたが、ケヤキ並木の背がとても高くなっていてビックリしました。奥の小学校側にも深い森のような場所があったり。それに学内だけでなく、まちにも緑がたくさんあるイメージがあります。井の頭公園を歩いて『ワイヨンの妻』の世界に浸っても、玉川上水をそぞろ歩いても、緑があふれていてとても気持ちがいいですね。

ただ、まちの雰囲気は当時と今とは大分違うのかな。私が学生の頃は日本全体がはしゃいでいたバブル期。今は無き近鉄百貨店の裏辺りは歌舞伎町も顔負けのわい雑な気配がありました。そこにお芝居の稽古場があったので、そんな怪しいところをよくウロウロしてましたね。ほかにもフォークやジャズミュージシャンが集まる小さなライブハウスが

### ● PRESENT

今回取材した、片桐はいりさんのサイン入り色紙を抽選で3名の方にプレゼント！詳しくは本誌折り込みハガキをご覧ください。



他にはないカオスなまちですね。

代の焦燥や若気の至りを思い出す、

文学の薫りに誘われてこのまちの学生になりましたが、海の近くで育ってきた私にとって、武蔵野市は「東京の郊外」というイメージ。気軽に足を運ぶにはちょっと遠いと思ってしまう(笑)。今の吉祥寺は「オシャレなまち」「住みたいまち」と言われているけれど、私には今でも学生時代の焦燥や若気の至りを思い出す、

あったり、個人が経営する小さな喫茶店があったり、個性の異なるものが、この小さなまちにあふれていたように思います。友人がバイトしていた「バウスシアター」や、中道通りであった「ウニタ書店」もよく行って長居をしていましたが、それはそれは個性的なまちでした。

